新世紀を語る

1面から続く

辻元清美さん

共生のため貧しくなる選択も

―経済は失われた十年、政治は混迷の十年とも言うけれど、市民という存在がこの何年かで非常に力をつけたんじゃないでしょうか。

「それはね、変な言い方やけど、貧乏になったからやと思うんですよ。バブルがあって、みんな浮かれとった。でね、ちょっと苦しくなってきてる。そういう時の方がものを考えるんちゃうかなぁ」

―辻元さんが考えるNPO（非営利組織）とは。

「何か志を持って、おこなっていく活動。しかし、今までのような反対運動でも、清く正しく美しくでもなくて（笑い）、事業的側面も持ち継続させていく。柱は、理念、オリジナリティー、事業としての運営。理念だけ正しいこと言うてても、事務所も持てない、そこで人も食べていけないようではあかん」

「政府、企業があって、市民がいる。が、ここにすき間ができてきた。NGO（非政府組織）は、政府じゃないけど、政府や行政がやってるようなことをやっちゃう。NPOは、企業じゃないけど、市民事業みたいなもの。ピースボートはこれに近い。やってるのは旅行のコーディネート。でも、船上で地球大学をやったり、カンボジアで地雷除去のサポートもする」

「南アのアパルトヘイト廃絶の過程では、NGOがすごく活動した。いま政府間で、日朝の国交正常化交渉やってますけれども、市民同士の不信感をどう取り除いていくのか。NGOやNPOの力が解決の一つのキーになる」

―次の世紀、NPOの勢力は強まっていくと。

「私は実態を知ってる分だけ、過度な期待を抱いてはないんです。ただ、キラッと光るダイヤモンドのように、二十一世紀を変える可能性を最も秘めてる潮流」

「NPOの法律的な原則は余剰金を分配しないってことだけなの。事業して余剰金が出たら、個人に分けず新しい価値の創造のために使う」

―金もうけはするが、それは最終目的ではない。

「そう。自分たちのいろんな目的、新しい多様な価値の創造のためにね」

「なんか物ばっかりあふれてイヤじゃないですか。もっとシンプルに生きたいと思う人は増えてるはずなんです。物じゃなくて事、事柄でワクワクする。物より事を大切にするっていう。自分がやりたい事を大事にする。それが社会を変革する力にもなっていくと思うんです」

―世界経済フォーラムの「明日のリーダー」に選ばれたとか。

「それで夏にジュネーブに行ったら、理事長がスピーチで、二十一世紀に社会の地図は塗り変わる、コミュニティーを中心に、使命を大切に仕事をする社会に変わっていくだろうと。柔軟にネットワーク型で運営していける組織、企業が生き残れる。NPOと企業が、パートナーシップをどんな形で持てるかがキーだと。欧米の資本家はすでに発想転換をしていってる」

「二十一世紀は、もう一度『連帯』とか『きずな』っていう言葉が大事になる。心のつながりとか、共存して生きていくためにお互いにちょっと助け合うとか。地域とか人の思いをつないだネットワークが重なり合っていく社会になるんじゃないか」

―六月総選挙では、運動のスタイルを変えましたね。

「有権者に、お願いしますって言わない。こびない。未来の世代に、自信を持ってバトン・タッチできるような社会に変えるための責任を一緒に取ろう。そう思う人は、私に投票して下さい、と」

―有権者をパートナーにした。

「有権者の責任ってことをはっきり言いました」

―二十一世紀の社会の設計図をどう書き換えようと。

「コンセプトは、今までの便利、経済優先の社会から、安心して、そんなぜいたくしなくてもいいから暮らせる社会。そして政策をトータルに書き直す」

「そのためにも政策の立案過程、立法の過程に、NPOや市民が参加できる回路をどんどん作っていく。これからの政治家は社会をデザインする役と同時に、市民と政治をつなぐコーディネーターの役割が重要になる。政党も同じ。機動性のあるまとまりで、市民勢力の受け皿になる、国会の中に、党を横断して流れる新しい政策潮流のコーディネーター役になる。つまり、政党のNPO化」

―日本は変わりますか、いい方に。

「私たちの仕事は、変わるというより、変えるって言わなきゃいけない（笑い）。学生時代にピースボートを出した時も、まず行動でした。教科書問題でなぜアジアが怒っているのか、自分の耳で聞きたい、目で見たいと思って、アジアへ行こうって呼びかけた時から始まった。自分たちで近代史を作ろうみたいな作業だったと思う。人間は心の底に、空間という座標軸と、時間の座標軸を持ってる。これがしっくりこないと不安定になって、変なことをしちゃったり、人に優しくなれない。自分の位置なんですよ、社会の中の。歴史的な連続性の中、そして今の地球の中の自分の位置」

―先行世代がやらなかったことですね。お金以外の価値を持ったNPOがあちこちに生まれた。

「地球規模で変わっている。自分らだけいいと、日本だけがいいというルールを決めてももうダメ。ほかの途上国の人たちとか、アジアの人たちとの共生を考えた際に、日本はもしかしたらちょっと貧しくなんなきゃいけないっていうルールを決めなきゃいけない時が、二十一世紀のような気がします。そうじゃないと日本は飛べない」

国会にはスニーカーで通う＝国会議事堂前で

■大阪で育ち、早稲田大在学中に「ピースボート」を設立。約3万人の若者を60カ国に送った。阪神大震災ではボランティア・コーディネーター。1996年の衆院選で初当選し、現在2期目。NPO法、被災者生活再建支援法などの議員立法にかかわる。今年、世界の政財界要人が参加する世界経済フォーラムの「明日の地球リーダー100人」に。社民党政審会長。著書に『永田町航海記』など。